

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八一八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両足で健全な国体を支える国家」を求めます。

『揺れる情(こころ)』通信④

稲荷山武田病院院長 土屋宣之／元京都医療センター外科部長
緩和ケア病棟に入院しているBさんは言いました。
「先生、辛い痛み・息切れ・怖い夜は、わたしが生きていく証拠ですよ」と。

情(こころ)とはなんと強いんでしょう。思様は自分が生きている証が欲しいんです。ということとは、それだけ生きていくことの難しさと不安に恐れおののいているのです。

しかし、生きている拠り所がこんなに辛く、こんなにしんどい事しかもう残っていないと思う時でも、連れ合いや子供さん、お孫さんが面会に来ると笑顔が溢れます。天蓋孤独の患者さんにはこの喜びはありません。

やっぱり情(こころ)の触れ合いに勝る、生きている証は無いんですね。

京都国立近代美術館

10月13日～12月10日

《京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち》

京都の明治以降の美術界の歴史は、東京や西欧との対峙の歴史と言っても過言ではありません。

開館六十周年を記念して開催する今展では、その中でも特に明治末～昭和初を近代京都画壇の青春時代ととらえ、土田麦僊(1887～1936)を中心に据え、小野竹喬、榊原紫峰、岡本神草などの代表作約八十点を四章に分けて展示します。

まさに青春時代と重なった画家だけでなく、上村松園、菊池契月、木島桜谷といった先輩作家達や師匠の竹内栖鳳も含んで一丸となり、東京、西欧、そして京都の伝統に挑んだ彼らの、青春時代特有の過剰さと繊細さとをあわせもつ、完成期とはまた異なる魅力を放つ作品群をご堪能ください。

《迷うこと》

常楽臺住職 今小路覚真

道に迷うことが時々あります。特に近年開発された郊外の大きな住宅地などに入ってしまうとその目的地にたどり着くのに随分と難儀します。目の前に目的とする建物が見えているのにそれが裏道であつたため、玄関へ向う道筋を探すのに時間がかかったりします。

こうしたとき力になってくれるのが、その住宅地全体を示した案内板です。ほとんどの住宅地、団地には必ずといっていいほどにこの案内板がどこかに設けられています。しかし、案内板があつただけでは、目的地の番号などが判明したとしてもそこに到る道筋は、それだけでは不明なままです。案内板に必ず書かれている文字があります。「現在地」です。わたしが現在どこに居るのが分かるか分からないかぎり、いくら目的地が分かっているにしても、そこに辿り着くことは不可能なのです。

《熟成するワイン》

イタシヨク 福村直

ワインは酒類で唯一、瓶内熟成の変化が楽しめるお酒と言われています。そのため他の酒類には無い、どの年のワインなのかを分かるようにヴィンテージが表記されています。ワインは寝かせてゆるやかな酸化熟成させることで少しづつ味が変わり、ワイン愛好家はその変化を楽しんでいるのです。しかし全てのワインが理想的に熟成するわけではありません。酸化に強い耐性を持つ要素となる糖度、酸度、アルコール度、タンニン、色素が高いほど長期熟成に向くワインとなります。そこで白ワインは赤ワインに比べると、色素やタンニンが不足しているため弱くなります。また高価なワインは安価なワインと比べ長く熟成できます。これは金額と品質が直結しているため、品質の高いワインはそれだけ素材となる良質なブドウを使っているため、酸化に対する要素も成長と共に自動的に濃縮されているからです。また適切な熟成にはワインセラーなどの温度が一定に保たれた適切な環境で寝かされなければなりません。

季節の家庭料理

田村真紀

《十月 秋ナスと鮭の南蛮漬け》

(四人分)

秋ナス二本・鮭切り身四切れ・玉葱小一個(薄切りにして水にさらす)・長ねぎ半本(五センチ長さの千切り)・みょうが二本(薄切りにしてから千切り)・赤唐辛子一本(種を取って小口切り)☆【米酢、だし各半カップ・薄口醤油大匙四・砂糖大匙三・塩少々】・片栗粉、揚げ油適量

鮭は骨を取って四等分に切り、塩を振ってしばらく置く。水気を拭きとって全体に片栗粉をまぶす。秋ナスはへたを取って横に二・三等分してから四ツ割にする。☆の材料をよく合わせ、玉葱、長ねぎ、みょうが、赤唐辛子を加える。揚げ油を一七〇度に熱し、秋ナス、鮭の順に揚げる。油を切って熱いうちに合わせた調味料にしばらく浸し味をなじませ、冷蔵庫で冷やす。

《大原流声明雑話⑩》實光院住職 天納玄雄

天台声明の大原流を大成した聖応大師良忍上人には、声明にまつわる伝説がいくつか伝わっている。

なかでも「音無の滝」にまつわる話が有名だろう。

音無の滝は来迎院の本堂から呂川沿いに山道を上がった先にある小さな滝で、岩肌をサラサラと流れる水音が涼やかである。その名の由来は、良忍上人が傍らで声明を練習した折、唱える声明の旋律が滝の音と調和して音が消えてしまった、というものだ。

天台声明の祖、慈覚大師が唐から持ち帰った「引声阿弥陀經」の旋律は、極楽浄土の水音、鳥の鳴き声、木々を揺らす風の音を写し取ったものだという。良忍上人の唱える声明の声は極楽世界の音と同じであつたから、滝の音と調和することが出来たのかも知れないと、私は思っている。